知覚と世界

Perception and World

星 野　　徹

Toru　HOSHINO

世界には様々なものがあり、私はそれらに取り巻かれて暮らしている。そして、それらのものは私とは独立に存在している。私が存在しようが存在すまいが、また私がそれらのものを知覚しようが知覚すまいが、それらのものは存在し続ける、そう私は信じて疑わない。もちろんこうした信念は誤りであるかもしれない。存在するのは私一人だけなのかもしれないし、ものは知覚と独立に存在するわけではないのかもしれない。しかし、とにかく私はものの存在を信じている。こうした私の信念は何に由来するのだろうか。ものの概念を獲得するための条件とはどのようなものなのだろうか。外界が存在するとはどのようなことなのだろうか。

Ⅰ　ヒュームとストローソン

私たちが物(body)の存在を信じるのはなぜだろうか。この問いに対して、ヒュームは『人性論』のなかで極めて巧妙な解答を与えている。ヒュームによれば、物の存在の信念についての問いは実は密接に関連する二つの問いからなるという。なぜ私たちは感覚に現れていないときにも対象が連続的に(continu'd)存在していると信じるのかという問いと、なぜ私たちは対象が心や知覚とは別個に(distinct)存在していると信じるのかという問いである。そして、二つの信念とも知覚の恒常性(constancy)と整合性(coherence)に由来する、というのがヒュームの答えである(Hume, 1739-1740/2007, Book 1, Part. 3, Sect. 2)。

帰宅途中に夜空を見上げるとそこには明るく輝く満月が出ている。就寝前に外を見ると、先ほどとそっくりな姿をした満月が見える。その満月は少しすると雲に隠れて見えなくなってしまう。しかし、しばらくすると隠れた満月とよく似た満月が顔を出す。このように知覚が中断した後に中断前と同じような知覚風景が再び姿を現すことは珍しくない。また、知覚の変化が規則的である場合がある。ヒュームは暖炉で燃える薪を例として挙げている。暖炉の薪はいつも規則的に変化する。しばらく目をそらしていた後には、いつもと同じようなしかたで薪は短くなり灰の部分が増えている。知覚がこのような恒常性や整合性を持つ場合、私たちは知覚の中断部分を想像力で補う性向を持っているとヒュームは言う。見えていない間も満月は存在し続け、薪は燃え続けていたのだと考えるように想像力は私たちに働きかけるのであ

＊ ほしの・とおる
埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授、哲学

る。こうして私たちは対象の連続的存在を信じるようになるのであるが、一方、中断の前後を通じて同一の知覚体験が継続しているわけではない。二つの質的に類似した、しかし数的には異なる知覚体験が中断をはさんで存在しているのである。すると、知覚の中断を挟んで存在しているのは、知覚ではなく、知覚とは別の何かでなければならないことになるだろう。このような経過をたどった末に、私たちは、連続して存在しているのは知覚とは別個の、知覚から独立に存在する対象であると思い込むようになるのである。

ヒュームの議論の妥当性を検討する前に、ストローソンの説を見ておくことにしよう(Strawson, 1959)。

西の地平線に沈んだ太陽が翌朝東の地平線から姿を現す。昨夜の太陽と今朝の太陽は同じものだろうか。港から出港した船が徐々に遠ざかり、やがて見えなくなる。しばらくすると同じような船がやって来て、先ほどの船に乗り込んだ人と同じような人が船から降りてくる。出港した船と港に着いた船は同じ船だろうか。先ほどの太陽や船は消えてしまったのであり、消えてしまった太陽や船とそっくりではあるものの別の太陽と船が出現したのではないだろうか。なぜ一度知覚から消えてしまった太陽や船が再び姿を現すことがありうるのだろうか。

こうした疑問に私たちは次のように答えるだろう。「太陽も船も見えなくなったからといって存在しなくなったわけではない。西に沈んだ太陽は消滅したのではない。地球の裏側に存在し続けているのだ。何かの陰に隠れると物は見えなくなるものなのである。見えなくなった船も消えたのではない。遠くの海を航海しているのだ。遠くにある物は見えないことになっているのである。こうして、船も太陽も私の家もエッフェル塔も見られていない間も存在し続けているのである。」

太陽や船が知覚と独立に存在すると言えるためには、それらが知覚の中断を挟んで再同定(reidentification)可能でなければならず、そのためには、太陽や船は空間の中に存在する対象でなければならないとストローソンは考える。船が知覚と独立に存在するためには、一度知覚されなくなった後に出現した船と以前に知覚された船が、単によく似ているというだけではなく数的に同一でなければならない。二つが別の船ならば、知覚されていないときにも最初の船が存在していたとは言えなくなってしまうだろう。船の知覚が生じるたびごとに新しい船が生まれることになってしまうだろう。そして、時を隔てた船の知覚が同じ船の知覚であるのならば、船は知覚されていない間中もどこかの場所に存在し続けているのでなければならないはずである。私の知覚体験の系列とは別に、船は独自の空間上の経路をたどって現在に至っているのでなければならないはずである。ストローソンによれば、知覚と独立に存在する対象を信じるためには空間概念を持つ必要があるのである。

ところで、この世界が音だけの世界であるとしよう。私に知覚されるのは音だけであるとしよう。私は知覚と独立に存在する対象の存在を信じることができるだろうか。というのも、音世界の住人は空間概念を獲得することができないように思われるからである。そこで、ストローソンは、音だけの世界でも対象の再同定可能性の条件が満たされることがあるだろうか

と問う。再同定が可能だとすれば、音世界では何が空間の役割を果たしているのだろうか。この問いに答えるためにストローソンは奇抜な思考実験を考案する(Strawson, 1959, Chap. 2)。

音世界では、同じ音色で同じ大きさの音が間断なく聞こえているとしよう。ただし、この音（ストローソンはマスターサウンドと名付けている）は音色と大きさには変化がないものの、音の高さは不規則に変わるものとする。音世界にはこのマスターサウンドとは別の音も聞こえている。こちらの音は、音色と音の高さは規則的に変化する。おなじみの楽曲を想像しても良いだろう。たとえば、ベートーヴェンの『エロイカ』のような曲が繰り返し聞こえているものとしよう。マスターサウンドと『エロイカ』もどきは、次の点で規則的に対応している。マスターサウンドの音が低くなるにつれて『エロイカ』の音量が小さくなるのである。そして、徐々に小さくなった音量はマスターサウンドの高さがある点を下回ると聞こえなくなってしまう。マスターサウンドの高さがさらに低くなると今度は別の曲のようなものが徐々に聞こえ出す。こちらは『オバ Q 音頭』そっくりの曲だとしよう。『オバ Q 音頭』が繰り返し聞こえたのち、マスターサウンドが徐々に高くなり始める。すると『オバ Q 音頭』は徐々に消えて行き、再び『エロイカ』が聞こえ始めるが、先ほどは第 1 楽章だったのに今度は葬送行進曲が聞こえてくる。すると間もなくマスターサウンドが低くなり出し、『エロイカ』に替わって『オバ Q 音頭』が聞こえ始める。10 分ほどでまたマスターサウンドが高くなると、『エロイカ』の第 4 楽章のようなものが聞こえてくる。マスターサウンドの高さの変化と曲の音量変化の間に規則性があるだけではなく、曲の中断時間の長さと聞こえてくる音列の関係にも規則性があるのである。

こうした体験が繰り返されるにつれ、音世界の住人は、『エロイカ』や『オバ Q 音頭』は聞こえていない間も存在し続けていると考えるようになるのではないだろうか。聞こえていない間もそれらが存在し続けているからこそ、葬送行進曲が聞こえてきてから約 10 分の中断ののちに第 4 楽章が聞こえてくるのであり、約 60 分後にはまた葬送行進曲が聞こえてくるのではないだろうか。

ストローソンによれば音だけの世界でもある条件が整えば音が再同定可能となるのであり、音は知覚と独立に存在しうると考えることができるようになる。こうした音世界においてはマスターサウンドが空間の代わりをしているのである。マスターサウンドの音高の変化が空間的距離の変化と同じ役割を果たしているのである。

ストローソンの思考実験について検討する前に二点注意しておきたい。なおこの二点はすでにエヴァンスが指摘していることである(Evans, 1980)。

こうした音世界において再同定されるのは音個体(sound-particulars)であるとストローソンは考えている。しかし、音世界で聞こえている一続きの音は、船や太陽のような物ではなく、時間上に延び拡がる出来事とみなすべきであるように思われる。音世界の人間が音を再同定したとすれば、その人は、今聞こえている音は先程聞こえていた曲の一部、すなわち時間部分だ、と考えているのである。

また、ストローソンの目論見にとってマスターサウンドの存在は不要である。確かにマスターサウンドを導入することによって次のようなシナリオを思い描くことができるようになる。

マスターサウンドの音が低くなると『オバQ音頭』が聞こえてきたわけであるが、高くなり続けたらどうなるのだろうか。『エロイカ』は徐々に消えて行き、ある一定の高さを越えると『東京五輪音頭』のようなものが聞こえてくるのである。そしてさらに高くなるとまた『エロイカ』が聞こえてくるのである。先ほどと今の『エロイカ』は、それが聞こえていたときのマスターサウンドの高さが違うので別の出来事であるとみなすことができるかもしれない。NHK・FMの東京局と埼玉局が異なる周波数にのせて同じ番組を放送しているようなものである。

このようにマスターサウンドを持ち込めば質的同一性と数的同一性の区別に似た区別を音世界に持ち込むことができるようになるかもしれない。しかし、音の再同定可能性に関しては、マスターサウンドが寄与するものは何もないように思われる。規則的な音の連なりが聞こえてくるというだけで十分である。ストローソンの想定が正しければ、音の中断時間と中断前後の音のつながりに規則性さえ見い出せれば音の再同定が可能であることになるだろう。そうだとすれば、結局のところ、ストローソンの思考実験はヒュームによる知覚の整合性の仮説を聴覚世界に適用したものと考えることができるだろう。それでは、ストローソンの思考実験は成功しているだろうか。

私にはそうは思えない。音世界の代わりに痛み世界を考えてみることにしよう。その世界には痛みの感覚だけが存在する。そしてその痛み、たとえば胃の痛みは、規則的に変化する。痛みは周期的に質が変化する。きりきりする痛みや鈍い痛みが規則的に繰り返しながら継続している。この痛みには不定期に休止期間がある。そして休止期間が終わると、休止期間の長さに応じて、痛みが続いていたと仮定した場合と同じような質の痛みが始まるのである。音世界の音と同じように、痛みは突然消えるのではなく、徐々に消えて行き、徐々にぶり返してくると付け加えても良い。こうした体験を繰り返すうちに、痛み世界の住人は痛みが生じていない時期にも痛みは継続して存在していると思うようになるだろうか。しかし、痛みが生じていないのにその痛みが存在するとはどのようなことなのだろうか。それは「痛みが存在するとともに存在しない」と言うに等しいのではないだろうか。

痛み世界の場合は痛みが途切れれば痛みは存在しなくなると思われるのに、音世界では聞こえない音が連続的に存在していることが可能であるように思われてしまうとすれば、それは音世界の思考実験の解釈に日常世界の音概念を空間概念とともに密かに紛れ込ませているからである。日常世界では音源が遠ざかれば音はだんだん小さくなり、もっと遠ざかれば聞こえなくなる。だから、日常世界における音は聞こえていないときでも存在することが可能なのである。こうした音概念が染みついている人にとっては、自分が音世界に生まれたとしても、聞こえていないにもかかわらず存在している音という考えに思い至ることは適当な条件が整えば可能であると思ってしまうのだろう。

音がだんだん小さくなって行くのは音が遠ざかっているからであり、聞こえなくなったのは音がはるか遠くに行ってしまったからだ、というように。しかし、生まれながらに音世界に住んでいる人が同じように考えることはないだろう。生まれながらの音世界人が音源の存在に思い至ることはないだろうからである。音世界人にとっては、音は単に大きくなったり小さくなったり消えたりを繰り返すだけである。それは痛みがただ激しくなったり和らいだり消失したりを繰り返すのと同じことである。マスターサウンドをそこに加えても、それが生粋の音世界人に音源のようなものの存在を示唆することはないだろう。音世界に存在するのは音だけだからである。

実は視覚世界についても痛み世界や音世界と同じことが言える。視野一面が赤に染まっているとしよう。視野は徐々に赤から橙、黄、緑、青、藍、紫と規則的に色合いを変えて行き、紫にたどり着くと再び赤に戻る。ところがこの色世界では不定期に真っ暗闇の時間帯がやってくる。闇の時間帯の長さと闇明けの色の間に規則的な対応があることが観察されたとしたら、色世界の住民は真っ暗闇の間にも色が存在し続けていると考えるようになるだろうか。あるいは、視野の真ん中に一本の線で囲まれた図形があって規則的に形を変えて行く。ところがこの図形は不定期に消えてしまう。消えている時間の長さと再び出現したときの図形の形に規則的な対応があることが判明したとすれば、図形は消えていた間にも姿を変えながら存在し続けていたとみなされるようになるだろうか。以上はすべてヒュームの言う整合性が成立しているケースであるが、恒常性の場合はどうだろうか。

視野全体が赤く染まったなかで、一時的に暗闇が訪れ、しばらく後に再び赤が戻ったとすれば、ヒュームが言うように、想像力の作用によって色世界の人は真っ暗な時間にも赤が存在していたと信じるようになるだろうか。形ならば、痛みならば、音ならばどうだろうか。

整合性が見出されたとしても、恒常性があったとしても、音世界、痛み世界、色世界、形世界いずれの住民も知覚体験と独立に存在する対象という概念を獲得することはないだろう。これらの世界において知覚は表象機能を獲得することができないからである。

現実世界において、音は常に何かの音である。車のエンジンの音であったり、ピアノの音であったり、犬の鳴き声であったり。それらは車の走行やピアノ演奏や犬の遠吠えの聴覚的現れなのである。また色や形も常に何かの色や形である。赤いのはポストであり、丸いのは野球のボールである。それらはポストやボールの視覚的現れである。しかし、聴覚だけの世界や視覚だけの世界の住民が物や出来事とその知覚的現れという考えにたどり着くことはないだろう。音以外の何かが世界に存在していて、今のこの音はその何かが発している音なのだ、などと音世界の人が考えることはないだろう。音世界には音がその現れであるような何かが入り込む余地がないからである。音世界の住民に言えることは、先程はあのような音が、今はこのような音が存在している、ということだけである。視覚世界でも同じことである。

それでは、耳をふさげば何も聞こえなくなり、目を閉じれば何も見えなくなるという現象が聴覚世界と視覚世界に加わればどうなるだろ

うか。

耳をふさぎ、目を閉じることができるということは、身体感覚を持つということであるとともに、さらに、知覚主体の概念を獲得する道が開かれるということでもある。自己の側の要因によって音や色が消える場合と、自己とは関係なしに知覚内容が変化する場合の違いがありうることになるからである。そして、耳をふさぐことによって何も聞こえなくなった場合には、音世界の住人は、今でも音は存在しているに違いないと思ってみることもできるようになるだろう。それは、仮に耳をふさいでいなければ音が聞こえているだろうという意味になるだろう。こうして、耳を意図的にふさぐことのできる音世界の住人は、ある意味において知覚から独立に存在する音という概念を持つことができることだろう。ただし、音世界の整合性や恒常性がこうした概念の獲得のための条件となるわけではない。音の出現に何の規則性もないとしても、耳をふさいでいる間にも音が響き続けていると思ってみることは可能である。ひっきりなしに不規則な騒音が聞こえてくるのにたまらず耳をふさいだ人は、今も騒音が響いていると考えることだろうが、その人はそのとき、特定の質の音を思い浮かべているわけではないだろう。どういった音かは知らないがとにかく今もうるさい音がしているはずだ、と思うのだろう。

耳をふさぐことによって音が聞こえなくなる場合もあれば、耳をふさがなくとも音が聞こえなくなる場合もあるということを知った音世界人が、音は聞こえていないときでも存在しているのかもしれないと思ったとしても、その人が、私たちと同様の対象概念を獲得したわけではない。私たちは、物は知覚していないときにも存在していると考えるとき、目を閉じたり耳をふさいだり触れるのをやめたりしても、それまで見たり聞いたり触れたりしていた対象が消えるわけではないと考えているだけではない。自分は何もしないのに、何かが見えなくなったり聞こえなくなったり感じられなくなったりした場合でも、その何かは存在し続けていることがある、とも考えているのである。太陽は地平線に沈んで見えなくなっても存在し続けるし、時計の秒針の音はパトカーのサイレンの音で聞こえなくなったとしても存在し続けているだろう。また、猫が手から離れて猫の感触が感じられなくなった後も、猫は存在しているだろう。私たちの持つこうした十全な対象概念を音世界の人は獲得することができない。やはり依然として音が表象機能を持つことがないからである。知覚主体の概念を音世界の住人が持つことができたとしても、音世界における音が何かの音であることができるようになるわけではない。音が表象するその何かが音世界には与えられていないからである。

ストローソンの思考実験は、知覚と独立に存在する対象の概念の獲得は対象の再同定可能性を条件としており、そのためには空間概念が必要であることを示そうとするものであった。しかし、対象概念を獲得するためには、人は複数の感覚様態を備えていなければならように思われる。見えているものと触れているもの、あるいは、見えているものと聞こえているものは同じものだ、という感覚様態間のいわば共同定(co-identification)可能性の方が再同定可能性よりもより基礎的であるように思われる。

一つの対象が複数の知覚器官によって知覚

可能であるならば、それぞれの知覚に与えられているのは同一の対象のそれぞれの知覚に対する現れとみなすことができるようになるだろう。そして、知覚体験のそれぞれがそれ特有の仕方で同一の対象を表象することになるだろう。また、対象が知覚と独立に存在する可能性についても思いが及ぶことになるだろう。見えているのも手のひらに感じられているのも同じ猫である。目を閉じれば視覚像は消えるが手のひらの感触は消えない。だから猫はまだいるのである。目を閉じる代わりに手を離せば触覚像は消えるが視覚像はそのままである。やはり猫はまだいるのである。猫が視覚と独立に存在することができ、また、触覚と独立に存在することができるならば、猫は見られも触れられもしていないときでも存在することができるはずである。また、猫は突然手をすり抜けるかもしれない。触覚像は消えても視覚像はそのままならば、猫はやはりいる。あるいは、突然あたりが暗くなり何も見えなくなるかもしれない。それでも手のひらの感触がそのままならば猫はやはりいる。こうして、猫は知覚主体の意図と無関係に知覚風景から姿を消した場合でも存在し続けることができるのである。

見えているものと触れているものが同じものであるとは、視覚像と触覚像は同じものの像であるということである。今、何かに触れているのが感じられる。目を開けばそのものを見ることができるだろう。しかし、そのときその人に見えるのはそのものの触覚像ではない。つるつるしたり冷たかったりといった触覚像が見えてくるわけではない。その人に見えてくるのは触覚像そのものではなく、触覚像の対象である。それまで触れていたものが見えてくるのである。人は見えているものに触れることもできるだろう。そのとき、その人はものの視覚像に触れたわけではない。ものの視覚像に触れたりそれをなめたりすることのできる人はいない。触れたのは視覚像の対象である。それまで見えていたものに触れたのである。触れることによってそれまで見えていたものの触覚像が現れたのである。

視覚像に触れたり、触覚像を見たりすることができないのは、それらがものではなくものの現れだからである。それらは心的な存在だからであると言い換えても良い。痛む傷口を見たりそれに触れることはできても痛みを見たりそれに触れることができないのと同じことである。他人が見ているものや他人が触れているものを自分も見たり触れたりすることはできるが、他人の視覚像や触覚像を見たりそれらに触ったりすることができないことも言うまでもないことである。

こうして、諸感覚間の共同定によって対象とその現れの区別が成立する。そして、知覚は対象を表象する機能を獲得するのである[1]。

ところで、ここまでのところにおいて空間概念はほとんど関与してこない。何かに触れるためには手の運動が必要である。そして、運動は空間的であるという意味において、ものの共同定を通じた知覚の表象機能の獲得に、ある種の空間概念が関わってくることは確かである。しかし、それは、ストローソンが要求する次のような空間概念に比べはるかに貧弱なものである。ストローソンの考える空間とは、知覚者としての自己が対象とともにその中に存在し、相互の位置関係によって知覚像が規則的に変容し、対象が知覚されなくなるような限界を超え

てさらに延び拡がっているものである。ストローソンによれば、ものは知覚の限界を超えた空間内に位置することがありうるからこそ、知覚されないときにも存在し続けると私たちは考えることができるのである。

ものは知覚されていないときでも存在しているという信念を持つためには、こうした空間概念が必要であるとするストローソンの説は、主知主義的に過ぎるように思われる[2]。

Ⅱ　痛みの場所

色や音が対象を表象する機能を獲得すると、色や音は対象の性質とみなされるようになる。そして、対象だけではなく対象性質としての色や音も知覚から独立して存在していると考えられるようになる。暗闇の中でもポストは赤いし、誰もいないところでも海鳴りがとどろいているのである。

痛みも音や色と同じように表象機能を持つことができる。胃の痛みは胃炎を、歯の痛みは虫歯を表象することができる。しかし、色や音とは違い、痛みが痛みの感覚と独立に存在しているとはふつうは考えられていない。鎮痛剤を飲んで歯痛がおさまれば、虫歯は存在したままでも痛みは消えてしまうのである。痛みの場合は痛むことと痛みが存在することは同じことなのである。

ところが、ウィトゲンシュタインは、色と同じように痛みも痛みの感覚と独立に存在すると言ってよいような場合がありうるという。それは次のような場合である。

ある物の表面には斑点があって、そこに触れると皮膚に痛みを引き起こすことがわかったとしよう。すると私たちはその斑点の場所に痛みがあると思うようになるのではないだろうか。その斑点が赤い色をしているとしよう。斑点を指して「あそこが赤い」「あそこに赤がある」と言うことができるように、「あそこが痛い」「あそこに痛みがある」と言ってもおかしくはないのではないだろうか（ウィトゲンシュタイン、『哲学探究』312）。

これに似たようなことは現実にも生じている。ウィトゲンシュタインの斑点に似た対象は現実に存在する。ハリネズミに触れれば誰もが痛みを感じるだろう。しかし、ハリネズミを指して「あそこに痛みがある」と言う人はいないだろう。痛みがあるのは針に触れた皮膚である。より正確に言えば皮膚の表面が痛く感じられるのである。同じように、赤い斑点に触れると痛みが生じるとしても痛みが斑点のある場所にあるわけではない。「あそこに痛みがある」のではなく「あそこに触ると痛い」のである。痛みと通常の色は違うのである。痛みと色を類比したいのなら次のような想定をするべきである。

ある個所、たとえばある棒の先端、に触れると触れた人にはどうしてか知らないけれども突然風景が赤く見えるような、そうした個所が発見されたとしよう。棒から手を離すと風景の見え方は元に戻る。だれが触っても同じ体験をするのであるが、赤く見えるのは触っている人だけであり、そばにいる人の視覚体験にはいかなる変化も生じないものとする。そうした不思議な棒が見つかったとしたら、その棒を指して「あそこに赤がある」「あそこが赤い」と人々は言うようになるだろうか。決してそうはならないように思われる。「あそこに赤があるわけ

でもないし、あそこが赤く見えるわけでもない。実際に近寄ってよく見てみても棒は赤くないのだから。あそこが赤いのではなく、あそこに触ると周りが赤く見えるのだ」と人々は言うことだろう。

しかし、ウィトゲンシュタインの想定にさらに手を加えれば、痛みが痛み体験と独立に存在すると言えるような状況を作り出すことができるかもしれない。

ある場所に近づくとその場所に面した皮膚に痛みが感じられてくるようになるとしよう。その場所に向いて歩けば体の前面の痛みが増して行き、後ろ向きで近づけば背面の痛みが増して行くのである。また、その場所から遠ざかると痛みは徐々に退いて行き、10 メートル以上離れると痛みは感じられなくなる。そのような場所が発見され、半径 10 メートル以内は立ち入り禁止になったとしよう。その場所に痛みがあると言えるだろうか。やはり、痛みがその場所にあるとは言い難いかもしれない。あそこに近づくと痛みが感じられるだけであって、痛みが生じているのはあの場所ではなくあの場所に向いた皮膚の表面だからである。

それでも、そのような場所が複数見つかったとすれば事情は少し異なってくるかもしれない。ある意味で、複数の人が同じ痛みを感じていると言ってもよいような状況が生まれるからである。そこに近づくと痛みが起きるような場所を A 地点、B 地点、C 地点等々と呼ぶことにしよう。ある人は A 地点の 10 メートル以内に侵入し、別の人が B 地点の 10 メートル以内に侵入したとすれば二人は別個の痛みを感じていると言ってもよいように思われる。また、二人とも A 地点の立ち入り禁止区域内にいるとすれば二人とも同じ痛みを感じていることになるように思われる。二人の痛み体験は数的に区別されるが痛みの対象は同じなのである。ちょうど、二人そろって満月を眺めているとき、二人の視覚体験は別個でも視覚対象は同じであるのと同様である。その場所を鉛で覆ってしまうとそこに近づいても痛みが生じなくなることが判明したとしよう。すると、痛みに数的同一性と別個性が適用されることに対する抵抗は一層少なくなるだろう。B 地点を鉛で覆えば B 地点の近くにいる人の痛みは治まるが、A 地点のそばにいる人は痛みを感じたままである。二人は「私が感じていた痛みとあなたが感じていた痛みは違う痛みだったのだ」などと話すことになるだろう。

ここまでくると、場所と痛み体験の関係は音源と聴覚体験の関係や視覚対象と視覚体験の関係とほぼ等しくなる。慣れてくれば、痛みの強さと痛みの生じている部位によって、痛みの源のおおよその場所が推定できるようになるだろう。しかし違いも残る。ある意味で痛みは外界に、痛むことと独立に存在すると言うことはできても、別の意味ではやはり痛みは皮膚の表面に感じられるのであり、その別の意味では痛みが痛むことと独立に存在することはできないからである。

視覚風景に視覚器官である目が含まれたり、聴覚風景に聴覚器官である耳が含まれたりすることは通常はない。風景を目で見るとは言えても、風景が目のところに見えるわけではない。音を耳で聞くとは言えても、音が耳のところで聞こえるわけではない。聴覚世界に耳の聴覚像はない。それに対して、痛みには痛みの器官である身体部位が常に入り込む。手のひらを針で

刺せば、手のひらで針の先を感じるとともに手のひらに痛みを感じるのである。痛みが外界に存在するような状況が想像できたとしても、痛みは常にどこかの身体部位によって感じられ、その身体部位にあるものとして感じられるのである。したがって、痛みが外界に存在すると言われる場合の「痛み」とは、現に感じられている痛みの原因を指すことになるだろう。

痛みの感覚と独立に外界に存在する痛みの基盤となるような物理的性質がどうしても発見できなかったとしよう。A 地点にも B 地点にも C 地点にも、他の場所と比べて何も変わったところは見つからないのである。その場合、外界の痛みは場所の持つ傾向性とみなされるようになるだろう。「あそこに痛みがある」とは「あそこに近づけば痛みが感じられるようになる」という意味になるだろう。すると、その場所に近づいても誰も痛みを感じなくなれば、その場所から痛みは消えたことになるのである。

痛みの基盤となる物理的性質が見つかったとすればどうなるだろうか。痛みの感覚を引き起こす原因となる未知の物理的事象がある日 A 地点や B 地点に発見されたのである。それらの地点に近づいても誰も痛みを感じなくなったとしても、真夜中でもポストは赤いと言われるのと同じように、そこに当の物理的性質がある限り、A 地点や B 地点に痛みはあると言われるようになるだろうか。おそらくそうはならないだろう。「外界の痛み」は傾向性概念のままであることだろう。私たちにとって、その場所が痛みの感覚を引き起こすか否かということがその場所に関する何よりも大事な情報だからである。その場所の物理的状態がいかなるものであれ、その場に行っても痛みが生じなければその場に痛みは存在しないと言うことだろう。外界の痛みとは、物質の脆さのような性質と同じようなものなのである。衝撃を加えれば壊れてしまう物質は、それがどのような分子構造をしていようと脆いのである。この点に関して外界の痛みは通常の痛みと変わらない。通常の痛みの場合も、虫歯があっても痛くなければ痛みは存在しないからである。

このように、痛みが、現実に生じている痛みの感覚と独立に存在すると言えるような状況を想定することは可能である。そのためにはストローソンのような洗練された空間概念が前提されなければならないだろう。そのような空間概念を持つものだけが、現に感じられていない痛みの存在可能性について理解することができるのである。

Ⅲ　知覚の因果説

これまでの考察は知覚の因果説をめぐる議論に見通しを与えてくれる。

知覚対象と知覚体験の間に因果関係が成立しているだけではない。これまでの議論が正しければ、何かを知覚していることを知っている人は、知覚体験が知覚対象によって引き起こされていることも知っているのでなければならない。

対象が存在することと対象が知覚されることの間には因果関係があることは多くの哲学者が認めていることであるが、知覚概念は因果概念であるというより強い主張に対しては根強い批判がある。たとえばスノードンは次のように問う(Snowdon, 2011)。

「殺す(kill)」「乾かす(dry)「開く(open)」といった因果的な動詞の場合、結果と、結果をもたらした主体とその行為の存在がともに含意されている。「A が B を殺した」のならば、B の死と B に死をもたらすという A の行為が存在しなければならない。「A がドアを開けた」のならば、ドアが開くという出来事とドアが開くことを生起させた A の行為が存在しなければならない。しかし、「見る」や「見える」が因果的な動詞だとすれば、「S に O が見える」において、何が結果で何がその結果をもたらした原因なのだろうか。「私に猫が見えている」において、何が結果なのだろうか。「猫が私に見られている」ことだろうか。しかし、それは単なる言いかえに過ぎないだろう。

それでは、知覚は日焼けや足跡のような因果概念に似ているのだろうか。日に焼けるのは太陽を長時間浴びたからである。足跡があるのはそこを誰かが通ったからである。日焼けや足跡はそれらを引き起こした原因の存在を含意するのである。しかし、何かが見えることにおいて、何がその因果的な起源になるのだろうか。猫が見えていることにおいて、何が原因として与えられているのだろうか。猫だろうか。猫は起源ではなくただそこに見えているだけであるように思われる。そこに見えている猫が起源だとすればそれではその結果は何なのだろうか。自分自身を深く観察してみても、見えている猫の結果がどこにあるのか見出すことはできないだろう。

このように、知覚表現は因果的な他動詞のように行為者と行為者によって引き起こされる結果の存在を含意するわけでもないし、因果的な名詞のように起源の存在を含意しているわけでもない。スノードンによれば、以上二つの例は知覚の因果説が誤りであることを証明するわけではないものの、知覚の因果説がその支持者が考えているほどの説得力を持つわけではないということを示しているのである。

見ることや見えることや聞くことや聞こえることが殺すことや切ることや開けることと異なるのはその通りである。また、知覚の因果説にいわゆる現象学的裏付けがないのも確かであろう。しかし、それでもやはり、何かが見えたり何かが聞こえたりしていることを知っているとき、私たちは見えている対象や聞こえている対象と視覚体験や聴覚体験の間に因果関係が成立していることを了解しているように思われる。

何かが見えているとは何かが視覚的に現れることであり、何かが聞こえるとは何かが聴覚的に現れることである。知覚対象の現れである知覚像にはものとは違ういくつかの特性がある。知覚像のそうした独特の在り方についてたとえばバークリーは次のように述べている。

私たちのあらゆる観念、感覚、あるいは私たちが知覚するものは…明らかに非能動的であり、それらの中にはいかなる力も作用もない。したがって、一つの観念あるいは思考対象は、他の観念または思考対象を作り出すことはできず、またそれらを変化させることもできない。このことが真実であることを納得するにはただ私たちの観念を観察するだけでよい。観念とその部分は心の中だけにあるので、観念には知覚されているということ以外のものは何もないのである。自分の感覚や反省の観念に注意を向けても、誰もそれらの中に力や能動性を知覚

しないだろう。それゆえ、そのようなものは観念には含まれていないのである。少し注意すれば、観念という存在は受動性と不活性を含意するので、観念が何かを行うこと、より厳密に言えば、観念が何かの原因となることは不可能であることが明らかになるのである（Berkeley, 1710/1949, pp. 51-52）。

観念がいかなる因果的効力も持たないというバークリーの説を全面的に受け入れることは難しい。空腹感は食べ物を探させ、痛みはうめき声を上げさせるからである。観念は信念をもたらし、行動を誘発するのである。ただし、ある観念と後続の観念のあいだに因果関係は存在しないという点に関してバークリーは正しい。ある時点の視覚像は後続の視覚像を生み出すわけではないし、それに影響を与えるわけでもない。ある時点の腹痛は後続の腹痛を生み出したり消滅させたりはしない。映画館のスクリーン上の像どうしの間に因果関係がないのと全く同じである。スクリーン上の像が後続の像のあり方に影響を与えるわけではない。スクリーン上の像はフィルムと映写機によって生み出される随伴現象なのである。ただし随伴現象とは言っても、全く因果的効力がないというわけではない。スクリーン上の像は映画館の暗闇を照らし、観客の心に何らかの痕跡を残す。これも、知覚像が知覚主体のあり方に影響を及ぼすことと類比的である。

知覚像に関してはそれらの間に因果関係が存在しないだけではない。知覚像は私たちの直接の関与を受け付けない。知覚像に対して私たちはある意味で因果的に無力なのである。知覚像の前にまずは感情から見ておこう。

喜びや悲しみや憂鬱さといった感情を私たちは自在に操ることはできない。悲しみや憂鬱さから逃れようとしてもどのようにすればよいのかよくわからない。悲しみは原因が明らかである場合が多いだろう。悲しみを引き起こした出来事をなるべく考えないようにする、といった努力によって悲しみが遠ざかることもあるかもしれない。

髪が伸びたら切ればよいし、寒い日に窓が半開きになっていれば閉めればよい。このように、ある種の身体状態や物の状態ならば、直接関与することによってそれらを変えることができる。しかし、悲しみについては間接的に作用することができるだけである。憂鬱さとなるとさらに対処が難しい。憂鬱さの原因は特定できないことが多いだろう。結局は抗うつ剤を服用する以外にはないのかもしれない。感情を直接コントロールする手段を私たちは持ち合わせていないのである。

痛みとなると悲しみや憂鬱さとは少し事情が違ってくる。痛みは対象の性質とはふつうはみなされていない。胃が痛いとき痛みは胃の性質であるわけではない。しかし、胃痛が胃の状態を表象していることは確かである。胃が痛ければ胃に何か異常があるのである。そして、一部の痛みについては痛む部位に直接働きかけることによって痛みの状態を変化させることができる。傷口に塩をすり込めば痛みは増すだろうし、薬をぬれば痛みはやがて治まるだろう。痛みは憂鬱さに比べれば対処のしようがあるとは言っても、やはり痛みに直接影響を与えることができるわけではない。痛みには触れることもできないし痛みを手に取って見てみることもできないからである。他人の痛みを考えれ

ば事情はよく分かるはずである。他人の傷口を直接縫うことはできても他人の痛みを直接消してしまうことはできない。傷口を手当てすることを通じて痛みが消えるのを待つのである。

視覚、触覚、聴覚といった知覚は対象を持つ。こうした知覚については、知覚対象の状態を変えることによって知覚像を変化させることができる。目覚まし時計の音を聞きたくない人は手を伸ばして目覚まし時計の鳴動を止めるだろう。ギターの音が嫌ならばギターの弦を押さえればよい。ピアノの音が聞きたければ鍵盤をたたけばよい。だれもが音源に作用すれば聴覚像が変化することを知っているのである。

触覚の場合も同じである。机のざらざらした触感が気に入らなければやすりをかければよい。つるつるした触感が得られるだろう。ふかふかした触感が好きならば、羊の毛を刈らずにおくだろう。

また、黄ばんだ壁の色が不快ならば壁を白く塗り替えるだろう。壁を白く塗り替えれば壁は白く見えるようになる。

他人の知覚像を変えたいときにも私たちは知覚対象に働きかける。話し声が大きすぎると言われれば、小声で話すようにするし、お風呂がぬるいと言われれば追い焚きをする。口を開けていて見場が悪いと指摘されれば口を閉じようとする。こうして自分でも他人でも、知覚像を変えたいときには知覚対象を変えようとする。しかし、自分の場合も他人の場合も知覚像そのものを直接変化させることはできない。赤い視覚像やピアノの聴覚像を対象の変化を媒介せずに赤から白に変えたり音を小さくしたりすることはできない。やはり知覚像に触れたり知覚像に薬を付けたり知覚像に電気的刺激を与えたりすることはできないからである。

知覚像を変化させる最も手軽で確実な方法は知覚対象に手を加えることなのである。このことはだれでも知っていることである。ところで、知覚対象が変化すれば知覚像が変化するということは、両者は因果関係にあるということである。目覚まし時計の鳴動を止めれば目覚まし時計の音が聞こえなくなるのは、目覚まし時計の鳴動が目覚まし時計の聴覚像を引き起こしているからである。壁を白く塗り替えれば壁が白く見えるのは、壁の白さが壁の白い視覚像の起源であるからである。そして、知覚対象が変化すれば知覚像が変化することを知っているとは、両者が因果関係にあることを知っているということである。誰もが知覚の因果説を受け入れて生きているのである。

ところで、目覚まし時計の音は、目覚まし時計が鳴り続けていても、耳をふさげば聞こえなくなる。黄ばんだ壁も目を閉じれば見えなくなる。ざらざらした感触も机から手を離せば消えてしまう。こうしたこともだれでも知っている。また、視線を移動させたり手のひらを移動させたりすれば――視覚像の上や触覚像の上を移動させるのではないことに注意。視線や手を動かすことができるのは像の上ではなく視覚対象や触覚対象の上でのことである――知覚風景が変化することもだれもが日常的に経験していることである。こうしたことを知っている人は知覚が因果的な過程であることを知っていることになる。過程の一地点に介入することによって知覚像が消えたり変わったりするからである。ただし、この事象は知覚が因果的であることを示すだけであって、知覚体験の原因が知覚対象にあることを示すわけではない。

また、多くの人は知覚と幻覚の違いを知っている。知っているとはいっても、正常な知覚と幻覚を識別することができるというわけではない。多くの人には幻覚の経験はないだろうし、幻覚に襲われても幻覚だとは気が付かないかもしれない。知覚と幻覚の違いを知っているとは、知覚概念と幻覚概念の違いを知っているということである。知覚には対象があるが幻覚には対象がないということを知っているのである。

幻覚には対象がないとは次のようなことである。幻視は目を閉じても消えることはないかもしれないし、幻聴は耳をふさいでも聞こえてくるかもしれない。目の前に見える青白い顔をした見知らぬ男の像を消そうと男の顔を後ろ向きにさせるため手を伸ばしてみても、それが幻視ならば手は空を切り、背後から聞こえてくる笑い声を止めようと後ろを振り返っても、それが幻聴ならば音源を見つけて音を消すことはできず、背中を這う蟻を殺そうと背中をたたいてみても、背中を虫が這う感覚が幻覚ならば依然として背中を蟻が這うような感覚は続くだろう。知覚像ならば知覚対象に働きかけることによって知覚内容を変えることができるのに、幻覚にはその道が閉ざされているのである。知覚と幻覚の違いを知る人は皆このようなことを知っている。したがって、知覚と幻覚の違いを知る人にとって知覚概念は因果概念なのである。

知覚の因果説は近代科学に触発されることによって生みだされた近代哲学の落とし子であると言われることがある[3]。近代科学は知覚対象と脳状態の関係を描き出してくれる。物質表面の分子構造と光の反射率について、目の構造と光刺激について、脳の視覚野の構造と機能について。そして、物質の表面構造から脳の視覚野のニューロンの状態に至るまでの因果の過程を明らかにしてくれる。さらに、脳状態と意識の状態には何らかの関係があることも知られている。すると、知覚対象と知覚体験が因果関係によって結ばれていると考えることは自然のことのように思われてくるだろう。

また、近代の原子論によれば物質を構成する原子には色も味もにおいもない。物が色やにおいや味を持たないならばそれらは心の中にあると考えられなければならない。物にあるのは色やにおいや味そのものではなく、それらを心の中に生み出す因果的な力なのである。

こうして、脳科学の展開と近代的原子論が知覚の因果説の誕生を促し、あるいは、知覚の因果説の裏付けとなったと解釈されることがある。確かに、知覚の問題が近代哲学の主たる問題となった契機として、同時代の科学が描く物質像をどのように全体的な世界像に取り込むかという問題意識があったことは疑いのないところである。しかし、知覚の因果説が、経験科学の発展によってその正当性が明らかとなるような類の説であるというわけでは決してない。見るとはどのようなことであるかを知っている人ならば誰でも見ることは因果的過程であることを知っていなければならないのである。

---

[1] それでは、共同定が可能となる条件はどのようなものなのだろうか。知覚間に何らかの対応が成立している必要があるのは疑いのないところである。すなわち、視覚・聴覚・触覚の内容全体、あるいはその一部の間に規則的な共変関係が観察される必要があるだろう。それに加えて知覚者には身体像が伴っている必要があるかもしれない。しかし、今のところ私にはこれ以上の見通しは立っていない。

[2] バージは 20 世紀の哲学が知覚をあまりに主知主義的に捉えていると批判している。そして、ストローソンに関しては、彼が物理的世界を客観的に表象するための条件の探求と、心から独立した対象という概念を獲得するための条件の探求を混同しているという。対象概念のための必要条件に過ぎないものを、ストローソンは、対象知覚の条件でもあるとみなしているというのである(Burge, 2010, pp.156-181)。対象概念のための条件として見た場合でも、ストローソンの説は過度に知性主義的であるように思われる。

[3] たとえば大森（1994、12-13 章）を参照されたい。

文献表

Berkeley, G. (1710/1949), *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge* in *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne,* A. A. Luce and T. E. Jessop eds. vol. 2, Nelson.(ジョージ・バークリ『人知原理論』大槻春彦訳、岩波文庫)

Burge, T. (2010), *The Origins of Objectivity*, Oxford University Press.

Evans, G. (1980), "Things Without the Mind", repr. in Evans, G. (1985), *Collected Papers,* Oxford University Press.

Hume, D. (1739-1740/2007), *A Treatise of Human Nature,* D. F. Norton and M. J. Norton eds., Oxford University Press. (デイヴィド・ヒューム『人間本性論』第 1 巻、木曾好能訳、法政大学出版局)

大森荘蔵(1994)、『知の構築とその呪縛』、ちくま学芸文庫。

Snowdon, P.(2011), "Perceptual Concepts as Non-causal Concepts", in Roessler, J. *et al.* eds. *Perception, Causation, & Objectivity,* Oxford University Press.

Strawson, P. F. (1959), *Individuals,* Routledge.

L・ウィトゲンシュタイン(1976)、『哲学探究』藤本隆志訳、『ウィトゲンシュタイン全集８』、大修館書店。